



### 三浦 幸子さん(加倉)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：5月8日

## いろんなことがあっても、仕事が救いでした

もともと洋裁師の資格を持っていた三浦さんですが、震災前はパワーストーンの鑑定などをされていました。震災直後から県内外での3か月間の避難を経て、2011年6月に福島市の仮設住宅に入居され、9月25日にはリメイクをベースにした洋裁店を開業。現在は、福島市栄町AXC(アックス)ビル2階のショップ「ふく福」で頑張っています。

ご主人と娘さんが鹿沼市に、息子さんが須賀川市、幸子さんとお母様は福島市と、今は離れ離れの生活ですが、家族はもちろん、親族や友人、隣近所の方々が集えるような、自然に囲まれた楽しい家を再建したいとおっしゃいます。

■家族や親戚、大勢であちこち避難しました  
義母と一緒に帰宅した途端、地震に遭いました。息子もおりましたが、主人は仕事、娘はクラブ活動で小高商業高校に出かけていました。異様な揺れに動けなくなりました。義母を守りつつ、車を家から離し、空き地に停めて余震に備えました。地域の指定避難場所である加倉運動場には誰も避難せず、不気味でした。そのうちに親戚たちが車で駆けつけ、6号線近くまで津波が来ていたことを聞きましたので、ホットカイロや毛布、上着などを車に詰め込み、大堀のグラウンドで夜を明かしました。電話も繋がらず、どうしていいかわからない状態でしたが、主人や娘と翌



▲福島駅東口から徒歩約5分。まちなかにお出かけの際はぜひ、お立ち寄りください。素敵な洋服や手仕事の品はもちろん、三浦さんのおしゃべりも楽しめますよ。

生活をしたり、猪苗代町の「マウント磐梯」にお世話になったりしました。当時高校生だった子どもたちの学校の情報は避難所以外では入手が難しかったため東和町の公民館に移り、その時に福島市の仮設住宅の募集を知り、母と義母を連れて入居しました。残念ながらその翌年の秋、義母は避難や狭い仮設住宅でのストレスや疲労のせいででしょうか、急に体調を崩して亡くなりました。■お客さまに助けられ、支えられて今があります  
最初に開いたチエンバおまの店には、大原病院に近かったことも幸いしたのでしょうか、浪江の方々や福島市のお客さまが大勢来てくださいました。福島市の方はものを大事にする方

「ふく福」  
10時～18時・日曜休み  
TEL 080-15577-6088  
※所用のため臨時休業する場合はお問い合わせください。

が多く、和服や洋服に対してはももちろん、暮らしに対しても遊び心を持ったさまざまな世代の方がお見えになります。浪江の方は、遠くは京都や首都圏、秋田などからも訪ねてくださいます。開店から約1年後にAXCに移り、リメイクした洋服の他に、飯野町やいわき市、相馬市などいろいろな地域の方々30人程のご協力や縫製や手芸品、バックなどさまざまな商品も増えました。店先の掲示板や電話で声をかけながら、そういった作者の方々の講習会などもやっています。仕事を終えて自宅に戻ると、隣家に住む母と晩酌を楽しんだり、休日には一緒に山形に山菜採りに行ったりしています。仮設住宅に住むと料理をしなくなりがちですが、時折帰る夫や子どもたちにとにかくさん作って、持たせたりしているんですよ。いろんなことがあったけれど、今の私にとって仕事が活力の源であり、休みには自然と触れ合うことが慰めになっています。

# 浪江のこころ通信



・第36号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

## 再取材シリーズ 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第36号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218



郵便はがき

9648790

料金受取人払郵便

二本松局  
承認  
1409

差出有効期限  
平成27年  
3月31日まで  
有効

二本松市北トロミ573

浪江町役場 二本松事務所  
復興推進課  
「広報なみえ」担当 行





新潟県

## 柴 恵美さん(請戸)

取材者：(特活)くびき野NPOサポートセンター 新保  
取材日：5月10日

### 家族の笑顔を守りたい

平成23年7月の『浪江のこころ通信』第1号に掲載された柴さん。現在、震災当時の避難先である新潟県柏崎市で暮らしています。息子さんの進学や新たに増えた家族(ペット)のこと、現在の心境などお話しいただきました。



▲柴さんご夫妻と新たに家族に加った「チョコ」と一緒に

■現在の家族のカタチ  
昨春秋、新潟県柏崎市内で一軒家を借り、新たな生活が始まりました。  
以前同じ市内で住んでいたアパートは、子どもたちの独立した部屋もない状態でした。受験生の息子、ピアノを習っている娘、子どもたちの環境を少しでもより良い環境に変えてあげたかったのが一番の思いです。  
当時中学1年生だった息子は、

今年の春より新潟市にある野球の強豪校へ進学し、寮生活を送っています。また、娘も兄と同じ中学校へ通いソフトテニス部に入部、充実した学校生活を送っているようです。  
震災当時一緒に避難してきたおじいちゃんとおばあちゃんは、現在福島県内で暮らしています。やはり、知人の多い慣れ親しんだ地域で生活したいという気持ちが強いです。  
息子が寮生活のため、現在3人家族ですが、新たな家族としてトイプードルの「チョコ」が仲間入り。とっても元気がよく人懐っこい性格です。息子も可愛がっていたので、よくチョコの写真を送っています。  
■NPOの活動をはじめました  
浪江町に住んでいたときは、近所のスーパーに行っても知っている人たちがばかりでしたが、柏崎市内で生活を始めた当初は知っている人もほとんどいません。避難当時は不安もたくさんありましたが、今では子どもたちの部活動などを通じてママ友

や知り合いも増えてきました。また、昨年の10月より、柏崎市内の避難者サロン『あまやどり』の活動に携わっています。サロンの活動を通じて、同じく柏崎市内で生活する浪江町のみなさんとも交流を持たせていただいています。  
当時の『浪江のこころ通信』にも書いていたように、「すぐに浪江に帰れると思っていた」「ここに落ち着きたくない、浪江に帰りたい」という気持ちもありましたが、今は夫の仕事、子どもたちの学校生活のことなどを考えると、「現状維持」かな、と考えています。  
生活を変えたいということは、本当に大変なことです。住むところや仕事を変えたり、子どもたちを転校させたりすることが、うまくいかない場合も考えられます。  
震災によって生活は一変しましたが、これからも家族の幸せや笑顔を守っていききたいです。



千葉県

## 猪狩 弥市さん・君子さん(権現堂)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋  
取材日：5月7日

### どこにいても、人とのつながりを大切に

柏市にあるN T T社宅には、今も60世帯余りの人たちが福島県等から避難して暮らしています。猪狩さんご夫婦は、社宅周辺の人たちとも自然な形でつながりを作り、自治会等の行事に積極的に参加しています。



▲猪狩さんご夫婦

震災前、私は妻と娘と3人で手芸用品店を営んでいました。店舗兼住宅は、駅前商店街から一本中に入った郵便局の向かい、車の通りは激しくなく、適当に人通りのある良い場所にあります。創業85年、祖父の代からの店ですが、店舗自体は28年前に建て替えたものです。店には、手芸用品だけでなく輸入雑貨なども置き、趣味の店として親しんでもらっていたのとは違います。震災による建物の被害は少なく、商品は雨風にさらされることなく、余り傷んでいません。さりとて、販売もできず、今の住まいに持ち込むには限りがあるので、ほとんどそのままの状態になります。

震災前、私は妻と娘と3人で手芸用品店を営んでいました。店舗兼住宅は、駅前商店街から一本中に入った郵便局の向かい、車の通りは激しくなく、適当に人通りのある良い場所にあります。創業85年、祖父の代からの店ですが、店舗自体は28年前に建て替えたものです。店には、手芸用品だけでなく輸入雑貨なども置き、趣味の店として親しんでもらっていたのとは違います。震災による建物の被害は少なく、商品は雨風にさらされることなく、余り傷んでいません。さりとて、販売もできず、今の住まいに持ち込むには限りがあるので、ほとんどそのままの状態になります。



▲君子さん手作りの「つるし雛」で明るい玄関

震災時、地震の揺れがおさまると、隣の床屋の店員の吉田さんが、「ガスが漏れている。どうしたらいい？」と飛び込んできました。あわてて覗くと、石油タンクが倒れているうえに、ガスが漏れて音を立てていました。近所にも聞こえるように、「ガスボンベ閉めるー」と叫びました。近所の畳屋さんがつぶれた。向かいの大黒屋さんが強い西風に乗崩れて行くのを見た時はショックでしたが、街中から火災が起きず、本当に良かったと思います。  
役場や警察署に行きましたが、職員も気の毒なくらい混乱していて、原子力発電所の事故など誰も頭になかったと思います。早朝の防災無線の避難指示を聞き、妻と娘2人と一緒に車で津島高校に行きましたが、津島高校は人であふれ、寒さもあり一時だけ居て、福島市へ向かいま

した。途中、川俣南小学校に行き着き、娘と私は、後から避難してくる人たちのために、大きな案内看板を手に道路に立ち、いわきナンバーの車を見つけては誘導しました。  
その後、私たちは親戚を頼って、柏市に避難して来ました。今、暮らしている借り上げ住宅は、取り壊し予定だったN T Tの社宅です。狭くて、古い住宅で、以前の暮らしとは比べようもありませんが、周囲の人たちの暖かさに支えられています。お正月の餅つき大会、お花見やクリスマスパーティーなど自治会や疎開支援の会、ライオンズクラブ主催等の行事がたくさんあります。また、支援してくださる獣医さん提供の交流スペースがあり、いつでも開放されています。  
私は商工会の役員をしていて、今も二本松で開かれる役員会に参加していますが、店の再開は難しいと思っています。85年続けてきた商売への思いはありますが、一方で娘たちが安心して住める場所を作っておきたいという親としての思いもあります。1年更新の借り上げ住宅の暮らしはとても不安定です。今の状況を受け入れ、今後の暮らしを家族と一緒に考えていきたいと思っています。